

木村兼葭堂旧蔵『年山打聞』について

福田 安典

日本女子大学では木村兼葭堂旧蔵の『年山打聞』（以下、女子大
本）を新たに収集した。本稿はその紹介である。

『年山打聞』は国学者安藤為章（二六五九—一七二六）の随筆である。
為章は中院通茂や伊藤仁斎そして契沖に学び、水戸の徳川光圀に招
かれた。『紫女七論』の著が知られていよう。

年山と号して著した随筆『年山打聞』は写本で博く読まれていた
が、文化元年、小宮山楓軒、伴蒿蹊の序、橋経亮の跋を付して『年
山紀聞』として刊行された。小宮山楓軒の序は（原漢文、句読点を
施し、一部用字を改める。（一）注記は筆者、以下同じ）、

先輩・年山安藤子（中略）典故に通ずるを以て称せらる。その
本藩に应聘せらるるに及ぶなり。入りて則ち義公（注…徳川光
圀）に待す。出て則ち史局に在り、偏に一時名士と接す。また
嘗て屢々京機の間に奉仕し、常に契沖師と周旋す。異聞渺から
ず。その平生耳目観る所を記す随筆、冊となすことおよそ六。
名づけて「年山紀聞」といふ。

とある。楓軒が序文を書いた寛政十一年は年山没後およそ百年が
経っていたが彼の随筆は、

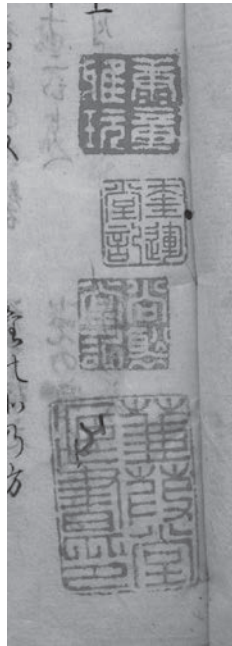
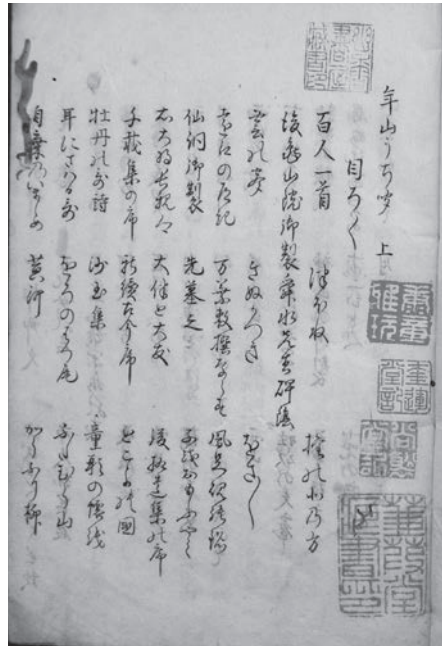
近時、この書頗る世の推す所となり、千里に伝播す。しかるに

読む者あるいはその謬誤多きを恨む。

という状態で、博く読まれていたが粗悪な写本も出回っていたよう
である。そこで、橋経亮が善本を求めて出版したことを、経亮みず
からが、

年山紀聞は世にいふ年山打聞の元本にて流布せしに、おほくも
れしこと、もあり。此ふみ典故を考に益あるのみにあらず。ま
のあたり人のをしへとなるへき事実をものせられたり。年山先
生の手書をうつして、水府よりのほせられしをもて板行せしな
り。

と記している（享和三年八月、『年山紀聞』跋文）。ここで『年山紀
聞』の異本の名が『年山打聞』であつて、経亮が「世にいふ」と記
すほどには諸本があつて流布していたことに注意したい。その「お
ほくもれし」『年山打聞』は経亮の言葉を信じるなら『年山紀聞』
刊行をもつて存在価値は減ずるはずであつた。事実『年山紀聞』を
収載した『日本随筆大成』第二期八卷（一九二八年十二月）では、「も
と『年山打聞』と題し、坊間に流布せしが、佚したるものありしか
ば、今の書名に改め上梓したるものなり」とあつて、『年山打聞』
を校訂編集したものととして版本『年山紀聞』を位置づけている。



ところが森銑三編『随筆辞典』（初版一九六一年、東京堂書店）には「為章には『年山紀聞』の外に、なおこの随筆（注…『年山打聞』のこと）があり、内容はそれと一部分重複もしているが、これはこれとして読むべき条々に富んでいる」と記される。『年山紀聞』と『年山打聞』は諸本関係にあるのではなく、別として把握できる可

能性を示唆したものである。この把握は『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八四年）にも踏襲され、『年山打聞』は『年山紀聞』と別項が立てられ、『紀聞』を取捨したのが本書とは思われない」と記述される。例えば、『年山打聞』にのみある「会津侯家訓」は諸大名の家への憚りから版本には収録しなかったと思われ、「神州恐委異」も呉の太祖の末裔と日本人との関係について林家と水戸光圀で一悶着があった記事であって、これも版本には収録されなかった。『年山打聞』には版本『年山紀聞』にはない記事があり、それを読みながら読者も多かったことは大いにありえることであろう。

その事情を裏付けるものとして、『年山紀聞』が刊行されてからも『年山打聞』は写本として多く流布している事実をあげることができる。その流布の一本が本学が収集した『年山打聞』である。

女子大本は、半紙本二冊、外題は直書きで「年山打聞 乾（坤）」、表紙は無地で薄茶色、二三・五種×一六・二種、内題は「年山うちりす」である。外題と内題は異なっている。

構成は上巻が二部、下巻が二部に分かれ、計四部が上下二巻になつている。さらには、依拠本には「会津侯家訓」「長松軒伝」「圓珠庵契沖行実」の三条が欠けていたため別本によって補っている。

内容は、目録によると「上巻」が

百人一首・つほね・権の北の方・後亀山院御製・舜水先生碑陰・をさをさ・遠江の道記・雲の声・きぬかつき・万葉勅撰ならす・鳳足硯の銘・仙洞御製・先墓之・子をおもふやみ・右大將長親卿・大伴と大友・後拾遺集の序・千載集の序・新續古今序・とこよの國・牡丹の哥詩・沙玉集・童形の懐紙・耳にさはる歌・をろのはつ尾・ふたむら山・自棄のいましめ・黄河・か

うふり柳・楠卿の碑・弔楠卿文・源氏もくろくの長歌・民の愁・古き女の名・市人称官名・ひめはしめ・色葉和難閑居の友・辞世の哥・柯求か哥・反名・家持は美男・石外か哥・惟足か哥・さ・なみ・匂と薫と・桜の本色・月山旅行・ひ・きのなた・老のうぐひす・西山の賦・長山氏・西山・七十賀・和歌に闕字・社頭の文台・(詩歌の懐紙(目録にナシ))・神武の御製・公事根源・眉ぬき齒くろめ・十二ひとへ・小児の額に犬の字・いはとかしは・月代・菊の哥・那須の碑・よみくせ・うはふみ・かしく・物の名・天子の諡号・亀居・筒居・丈六居・中古の冠・濱主・伝国璽・官底・歌の聞やう・代匠記の序・新續古今雜・くずしき・西山の御詠・五歩詩・阿部仲麻呂詩・後柏原院御製・揚名介・みつかひとつ・とのぬもの・も、ちとり・やさしきうつくしき・谷く、いなせ・玉は、き

の条々から成る前半部と、

露としつく・立志・なからの橋・泰姬宮の御詩歌・千年山八境の記・ゆらのと・山家の記・朴翁居士・朴翁に贈る詞・西山公・八重さくら・冬の鹿・かなつかひ・嵯峨隠君子・遊女妙・賀儀・本朝世紀・将棋・彰考館別館紅葉宴の序・彰考館別館の記・為章・彰考館・奉送西山公序・同人・桜戸・隠士宗好か歌・盆石の歌・都鳥・礼儀類典序・もろこし船・藏千字文記・處子維禎・續千載の歌

の条々から成る後半部で構成される。

下巻は、

時代不同の歌合・君主の明・疑はしき歌・古万葉の序・うらさひし・柿本人麻呂・山部赤人・猿丸大夫・世継ものかたり・尺

八の笛・しのふ草・中務集の歌・富士の歌・別戀・持統の御製・耕雲千首・神無月・安元三年の火・日本後記の偽書・夫婦の別・漫吟集の序・女貧家・清少納言・誤て作者を定む・西山公の和文・同・安分無求・平家物語の誤・隠士長流

の条々の前半部と、

いろは・俊頼朝臣の手跡・あさな・賢をもとむ・長歌短歌・あさがほ・鹿火屋・おもひ草・易然集 後詠・五節のはしめ・おきつ嶋もり・ねよとの鐘・玉つしま・修学寺八景・千年山・天地の始終・藤房卿の歌・端午のかぶと・八朔 尾花のかゆ・いきみたま・かたをなみ・久木・二鞘刀 七枝刀・天狗・頼政卿・新勅撰集・秋ざり衣・花生子 伝生子・本所の侍・茶・水無月祓・ま・母・神州恐委呉・本朝世紀・五百代小田・舎人親王・をそなたはれを・心葉・もすの草漏・夏の鶯

の条々の後半部からなる。末尾に

会津侯家訓 略す

長松軒雅翁の伝 略す

圓珠庵契沖阿闍梨行実 略す

とあって、依拠本にはこの三条がなかった。そのため別本をもって会津侯家訓、長松軒伝、圓珠庵契沖行実の三条を補っている。

この三条に端的に示されるように女子大本は省略の多い本文を有しており、他にも目録には名が見えるものの本文記事がないもの、あっても「浦嶋か子事有により偽書云説なり畧之」(日本後記の偽書の条)、「外に引詞あれ共諸書出たる事ゆへ畧す」(八朔 尾花のかゆの条)として省略された条、さらには「畧之」(藤房卿の歌の条)とだけ書かれて記事がない条も散見する。その意味では善本とは言

いがたい。

しかしながら女子大本には多くある『年山打聞』の一本として簡単に処理できない要素がある。それは伝来のよさである。図版で示したように、女子大本には「康章雅玩」「奎運堂記」「尚裴堂記」「兼葭堂藏書印」「幽香書屋藏書印」が捺されている。このうち「兼葭堂藏書印」は江戸時代を代表する文人木村兼葭堂の印である。すなわち女子大本は木村兼葭堂旧藏本ということになる。また「尚裴堂記」は鈴鹿本今昔物語集の旧所藏者鈴鹿連胤、「康章雅玩」は秋田神職の出で大坂の中之天神社神主でありながら、浅田宗伯に師事した漢方医でもあった中野康章（居室名「大同葉室」）の所藏印である。歴々の藏書家の読書に供した一本であった。加えて大坂の古書肆・鹿田松雲堂が扱ったことを示す書片も遺されている。

前述のごとく、女子大本の本文は省略が数カ所ある。にも拘わらず、兼葭堂以下の藏書家の手を通過したのはなぜであろうか。その事情を解明すべき材料はないが、あるいは本書の底本や書写に関わった人物ゆえのことと考えることも可能なので、以下に記しておく。

会津侯家訓、長松軒伝、圓珠庵契沖行実の三条を欠いた底本とその書写を示す、

元禄壬午正月十一日 水戸府下安藤新介為明拝撰

明和二乙酉年春三月写之 伊州上野城内喜田村矩常

右喜田村氏一本写之畢

同歳三戌年孟春 愛洲實石 爵

という記述が、おそらくは底本の末尾と思われる箇所に記されている。『年山打聞』の原奥書「元禄壬午正月十一日 水戸府下安藤新

介為明拝撰」を持つ本を、明和二年三月に伊州上野城内すなわち伊賀藤堂藩の喜田村矩常が書写し、その喜田村本を明和三年に愛洲實石が写したとの経緯が判明する。

喜田村矩常には藤堂藩史料『公室年譜略』の編著がある（『公室年譜略—藤堂藩初期史料』、清文堂、二〇〇二年）。愛洲實石は伊勢愛洲一族の一人と思われるが未詳である。この愛洲實石書写本が鈴鹿石薬師宿の萱生由章の手に渡ったのか、それともさらに萱生由章が書写したものか、とにかく萱生由章が所藏していたことは、女子大本の次の奥書によつてはつきりする。

右年山打聞二卷伊勢国石薬師住以萱生氏本於武江官舎写之

原本会津侯家訓長松軒惟翁伝圓珠庵契沖阿者梨伝闕 今同人自記以双（松）漫録書而加卷末矣

助筆 植木定賢 武市幸雄識

安永二癸巳四月五日

安永二年に武市幸雄が萱生由章所持本を「武江官舎」で書写した。ところが原本には「会津侯家訓」・「長松軒惟翁伝」・「圓珠庵契沖阿者梨伝」が欠けていたので、同人（萱生由章）自記の「双（松）漫録書」（松は朱字による後補）によつて加筆したというのである。

萱生由章は、『国学者伝記集成』に拠れば、享保二年生まれ、依田貞鎮に国学を、冷泉為村に和歌を、藤堂元甫に師事したという。自筆の写本が六百冊に及んだという国学者である。女子大本成立直後の安永四年に没している。女子大本も萱生由章の写した膨大な写本の一つに由来する。『双（松）漫録書』は不詳。

以上を整理すれば、女子大本の原型は明和二年三月に伊賀上野で藤堂藩の喜田村矩常が書写したものであり、その喜田村本を明和三

年春に愛洲實石が書写したのが原本であったと思われる。その愛洲本（その転写本）が伊勢国石薬師の萱生由章の手に渡ったのである。女子大本に多くある省略はもとからあったのかは不明ながらこの複數にわたる転写過程で生じたものである。しかしながら、閲覧者もしくは書写希望者はその省略部に関心を抱くものがあったことは想像に難くない。特に「会津侯家訓」・「長松軒惟翁伝」・「圓庵庵契沖阿者裂伝」の三条については、例えば『近世畸人伝』（寛政二年）契沖の項には「右伝、安藤年山著す所の行実」とあり、安藤年山の項には

しばしば浪花にて至て其説をうく。されば契沖の行実を著して、其著書、年山打聞に記せり。今此冊子に取れる所なり。凡此打聞のうち著所をもて、其學術も、人となりも温恭もはかりしらる。

とあって、当時の契沖情報における『年山打聞』の重要性が明記されている。『近世畸人伝』は博く読まれたと思われ、『近世畸人伝』により契沖を知った人物が原拠『年山打聞』を偶然目にする機会を得たならば、やはり契沖の記事に目を通したいはずである。その人物の一人が萱生所持本を最終に書写した武市幸雄である。武市幸雄も経歴不詳だが、萱生所持本を書写した段階で「圓珠庵契沖阿者裂伝」を含む三条の欠落を惜しみ、同じく萱生由章「自記」の『双（松）漫録書』によって補ったのである。

明和二年の伊賀上野での書写より、武市幸雄の書写・補填までの複數の経緯を経て成立した『年山打聞』は木村兼葭堂の書架に置かれることとなった。兼葭堂の蔵書は二万冊とも十万冊とも言われ、兼葭堂没後には官命により幕府に献納させられ、昌平坂学問所そし

て現在の内閣文庫に引き継がれているほど、当代きつての蔵書家であった。その兼葭堂が女子大本に触手をのばした理由について以下のような私見を提示しご批判を受けたい。

兼葭堂は享和二年に没しているので、版本『年山紀聞』（文化元年）は当然見えない。一方、『近世畸人伝』の所拠資料たる『年山打聞』および同郷浪花人たる契沖、その教えを受けた安藤年山のこともこれまた当然熟知していたために、当時巷間で書写・流布していた『年山打聞』に関心を持ち、それを入手したのではないだろうか。

女子大本の書写経緯を改めて整理すれば、この時期の『年山打聞』を求める多くの声が聞こえるようである。その熱気に押されるかのように兼葭堂は入手した当該本に「兼葭堂蔵書印」の印記を捺した。後に当該本は兼葭堂の手を離れ、鈴鹿連胤や中野康章という各時代の蔵書家の手を経て、日本女子大学の所蔵となった。